石破茂衆議院議員に聞く（1）「農業所得と自給率に国費を」【食料・農業・農村／どうするのか？　この国のかたち】

農業協同組合新聞

2024 年 7 月 12 日

25 年ぶりに食料・農業・農村基本法が改正され、新たな農政に期待が高まっている。「この国のかたち」を考える本シリーズ、今回は農相も務めた石破茂衆議院議員に農政と農協のあり方を聞いた。聞き手は谷口信和東大名誉教授。

石破茂衆議院議員

谷口　自民党の危機が日本社会の危機と背中合わせで深まる中、石破議員への期待が高まっています。今日は農政からこの国の行方まで、存分にうかがえればと思います。改正食料・農業・農村基本法が施行されました。しかし、もっと抜本的に農政を転換すべきだったのでは、とも思えます。石破さんはどうお考えでしょうか。

石破　農水大臣を務めたのは麻生内閣の時ですから 13 年前です。そのとき「生産調整をやめる」と言い、かなり抜本的な農政改革に手を着けましたが、民主党政権になって頓挫しました。その後私は、政調会長とか幹事長とか党務の方に入りました。

私が会合に行くとみんな黙っちゃう。威圧感があるのでしょうか（笑）。ただ、これでいいのかなという思いは持っております。

「自給率」の議論があまり好きじゃないのは、計算する際の分母は、その国で提供される食料すべてですから、食べ過ぎも食べ残しもみんな入る。食料自給率が一番高かったのは敗戦直後、餓死者が出た時期でした。

谷口　海外から食料を買えなかったから。

石破　そうです。アフリカの飢餓の国も高い。私は自給率より「自給力」なんだろうと思っています。必要なのは、農業者の人口構成がサスティナブルであること、農地が健全に維持されること、単収、農業の基本的技術を維持向上させることです。

谷口　まったく正論だと思います。

石破　農業は、土と光と水と温度の産業です。日本は土が肥沃で豊かな水が流れ、連作障害がない水田という装置があり、光が適度に降り注ぎ、気候は温暖である。こうした条件が揃い、なおかつ勤勉な農業者がいる。それなのに農業が発展しなかったのは、国策のせいだったと思います。

谷口　米は重要ですが、余りに偏り過ぎたと思うのですが。

石破　かつて「米価は百姓の給料だ」というスローガンがありました。私が最初に当選した昭和 61 年には、全中が与野党の候補者に「米価引き上げに賛成しますか」みたいな踏み絵を踏ませ（笑）、大多数が賛同しました。

谷口　春闘にならって。

石破　当選１回の頃は、米価を決めるのに３晩、４晩徹夜しました。「米価を上げるぞ」と議員たちは気勢を上げ、テレビカメラもいっぱい来ます。でも夜中になるとみんないなくなる。で、朝になってテレビカメラが来ると、みんなも戻ってくる（笑）。米価を税金で上げるという政策が本当に正しかったのか、未だに誰も検証していないのです。

東京大学名誉教授谷口信和氏

谷口　私は米価が特に高かったとは思いませんが、米以外の価格政策が余りなかったと思います。石破さんの地元の鳥取県は二十世紀梨などが盛んなところですが、それらについての補償は何もないんですよね。多くの農作物は奨励されてつくれば、過剰になって値段が下がる。その繰り返しで、その後、輸入も拡大しました。飼料生産はどうでしょうか。

石破　畜産は食べちゃったらおしまいですから、安全保障とは違うカテゴリーだと思っています。「今日はビフテキだ」というのは盆か正月、それでいいと思うんです。人口半減時代の稲作とは何であり、畜産とは何であるかをもう一度見直した上での基本法議論だったのでしょうか。

谷口　そうした議論をほとんどしなかった。

石破　と思います。私が農水大臣だった時、スイスの農業大臣と親しくなって何度も議論しました。彼女から、「スイスの卵は高く、フランスの卵は安い。でもスイス人はスイスの卵しか食べ

ない。山間地で養鶏をしている人たちがスイスを支えているから、安いからといってフランスの卵は食べない」と聞き、ほんとかよと思いましたが、本当だそうです。
日本だと、安ければ外国から買えばいい。思想という言葉を敢えて使うとすれば、その思想は間違いだと思うんです。腹が減っては戦はできない。どんなに立派な船や飛行機を買っても、兵隊さんの食事がなかったらどうするのか。防衛費は５年で 43 兆円、他方で農水省の予算は全然伸びない。これって変でしょ？　という議論がありません。

谷口　だから防衛大臣と農水大臣を経験した石破さんに期待しているんです。今までは食料安全保障を前面に立てた農業基本法などという話はなかったのですが、そう言わざるを得なくなったのは時代の変化ですね。
石破　いかにして農地を増やし、農業生産を増やすかということに世界各国で努力しています。日本では、農地は減り、農業者も減り、何が素晴らしいのか。
私は田中角栄先生の「最後の弟子」ですが、角栄先生は生前、「あの戦争に行った奴がこの国の中心にいるうちは大丈夫だ。だが、いなくなるとこの国は危ない」とおっしゃいました。その危惧はこのことだったんだな、と最近つくづく思いますね。

全日農という組織があって、いいことをしています。鳥取の会合に呼ばれて行くと、「米価は農民の給料である」というノボリが立っているので、「こんなことを言っているからだめなんだ。米価は下がるのだからその分、直接所得補償でいいんだ」というと、何だそうかみたいな話になります。

先日も日本農業新聞全国大会の後の夕食会がニューオータニの宴会場であったので、歴代農水大臣が揃った席で同趣旨の話をしたら、野党席から拍手が起きました（笑）。

あの会は結構大事にしていて、すべてのテーブルを回って命がけで酒を飲むんです（笑）。「お前の言うとおりだよ」という人が結構いて、今の農政はちょっと違うんじゃないかってことを、現場のＪＡや農業者は気が付いているのかもしれないな、と思います。

石破茂衆議院議員に聞く（2）「農協はもっと政治運動を」【食料・農業・農村／どうするのか？　この国のかたち】

農業協同組合新聞

2024 年 7 月 12 日

衆議院議員石破茂氏

谷口　「安ければいい」という風潮は何なんですかね。

石破　たぶん、三波春夫先生が悪いのであって（笑）、「お客さまは神様です」という言葉が国中に広まった。三波先生は、ステージに立つときは「お客様はみんな神様だ」という言葉を、心を清めて歌うという意味で言ったのであって、「安ければいい」という意味ではなかったのですが。

ＪＡに関わる新聞ですからはっきり言いますが、「一人は万人のために、万人は一人のために」という精神は生きているのでしょうか。儲からなくなったら農協のスーパーは撤退する。ガソリンスタンドも撤退する。これは協同組合精神とは違う気がしますが。

谷口　まあ、一般企業の精神ですね（笑）。ちょっと全中などは静かになっちゃったのかな。与党と仲が悪くないし。

石破　与党と一体化してどうするんですか。最近は労働組合まで与党と一体化して。もっと政治運動をしていい。今の日本では、みんな「自分が」「自分が」。社会のため、人々のため、次の時代のため、というきれいごとがもう少しあってもいいのに、と思います。

谷口　今春、私も選考委員を務めている農水省の飼料用米多収コンクールがありました。やっと今年、10a あたり単収 900 キロを超える事例が出てきました。とろが、この段階で飼料用米多収の奨励はもういいとコンクールが打ち切られかけたんです。ところが反対が広がったんでビックリしたことに継続になったんです。これは驚きです。

実は水田をつぶして畑にして、畑で麦、大豆、子実トウモロコシを作るという方向に農政は舵を切っていて、そっちの方が単収も高いし自給率も上がるというのです。しかし日本は、石破さんもおっしゃるように水田がベースの国なので、水田をもっと生かすところから考えるべきじゃないかと思うのですが。

石破　飼料用米の政策的位置にはいろいろな議論があります。私、ラーメン議連の会長もしているのですが、外国産麦で作ったラーメン、国産麦で作ったラーメン、米粉で作ったラーメンを食べ比べたことがあります。20～30 年前だと米粉ラーメンなんて食べられたもんじゃなかったんですが、今はいけます。

谷口　小麦は戦後に普及した農林 61 号が 70 年間にわたって優良品種でした。品種改良がほとんど進んでいなかった典型です。農業政策は焦っちゃだめなんで、長期戦略が必要です。畑で作る小麦は元々の畑で作ってほしいと思います。

農産物価格問題についてはどんなふうになりそうだと思っていますか。来年の国会に新しい法律を提出して「農産物価格に生産コストを反映させる」という話になっていますが。

石破　国費を投入する価値はいずこにありや、ということだと思うんです。直接所得補償がＷＴＯの枠組みではセーフの政策だと思っているのですが、民主党が戸別所得補償を出した時にさんざん罵倒したのは私たちなので、その反省も踏まえ、努力した人が報われるための直接支払いとは何なのか、という話だと思うのです。農業者の所得増大と自給率の向上に資するものでないと、国費を投入しちゃいけない。ＰＤＣＡサイクル的な検証のシステムを作っておく必要もあります。

谷口　最後に、これは私の希望なのですが、立ってください！

石破　立っていいことなんかないですよ（笑）。議員になって総理大臣を 19 人見てきましたが、幸せになった人は誰もいません。

谷口　それでも、求められる人はいる。

石破　それは天命ですね。

谷口　勝手なことを申しました。今日はありがとうございました。

（インタビューを終えて）

▼17 年、18 年に次いで 3 度目のインタビュー。今回が最も短時間▼渦中の人だけに来訪者が溢れていたからだ▼（さすが！その一）筆者とは微妙に立場は異なるが自給力を重視する考え方はほぼ首尾一貫していた。ブレが少ない政治家だ▼（さすが！その二）JA も労働組合も与党と一体化しては存在意義がない。それぞれがもっと政治運動をせよとの意見に共感。意見の異なる者が合意に至る道筋が民主主義の原点だとの哲学がそこにある▼（さすが！その三）腹が減っては、戦はできぬ。防衛費の膨張 VS 農水予算低迷。食料安保の話なのに変だよねという議論の不在を喝破。さすがに、石をも破る政治家だと改めて認識した。（谷口信和）

【食料・農業・農村／どうするのか？　この国のかたち】京大准教授　藤原辰史氏　世界の難問に立ち向かう主役は農業

農業協同組合新聞

2024 年 7 月 10 日

一覧へ

飢餓と貧困、そして気候危機に日本の農業がどれだけ貢献できるのか。自国の食料確保はもちろん重要だが、地球規模の課題に応える日本農業のこれからの挑戦も「この国のかたち」に関わる。農協の役割も含め藤原辰史氏が提起する。

藤原辰史氏

世界視野で農を考える

日本農業が目指すべきことは、日本だけが幸せになることではない。いまの自分だけが幸せになることでもない。日本を含む世界の貧困者、飢餓者のくらしを改善し、豊かにする日本農業を目指すべきであり、自分の死後の農村が住みやすくなるような地域も耕す農業を目指すべきである。

日本国憲法前文にはこう書いてある。「われらは平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めている国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思う」。「専

制と隷従」を促進するのではなく、解消するのが農業の役割である。では、日本の農業は、どこまで世界の貧困者や飢餓に対して闘ってきただろうか。

なぜ飢えはなくせない

世界中の食料が世界中の人間を養えるほど生産できているのに餓死者を４秒に１人のペースで生み出しているのは、多くのジャーナリストが述べているように、グローバル・フードシステムにほかならない。世界中の農民に高価な欧米産技術を押し付け、借金を増やし、世界中の消費者にたっぷりの広告代と有名人の広告出演料とプラスチック代を支払わせるシステムのことである。それが、世界中の低所得者と貧しい農民に、巨大企業への隷従を強いている。世界中の農作物を巨大な倉庫に集めて管理し、投機で儲ける穀物メジャーのやり方を否定すること。食べものは投機の道具であってはならない。世界の技術と、欧米産の農機具、化学肥料、農薬、種子の四点セットを普及し、「飢餓を救うためです」と言って経済途上国から大量のお金を吸い上げるやり方を否定すること。こうやって、インドやソマリアの農民たちは借金を強いられ、財産を失ってきた。

グローバル・フードシステムに日本が加担したところで、世界の貧困地帯の農家はもちろん、日本だって幸せにならない。農業は本来、アウトソーシングではなく、インソーシングを徹底させる産業であったはずだ。テクノロジーありきの農業は世界の農民の格差を広めるばかりで、正直、いまの若者の関心から外れていく。

若者の理念に耳を

そんな日本の、理念のない農業には若者は期待をせず、就農もしない。高校や大学を出た学生で、農業をやって世界を少しだけでも変えたいという人は年々少しずつ増えている、と、私のところに相談に来るたくさんの若者たちをみていると思う。農業をやりたいという若者の声に耳を傾けてほしい。妨害をしないでほしい。彼らにはお金も権威もないが、理念だけは豊富にある。もちろん、現実が厳しいことは百も承知である。だが、地球環境破壊という世界的課題に立ち向

かいたい。無縁社会という社会の課題に立ち向かいたい。エコロジカルな力が眠る農村からこそ大胆な試みが可能なのだし、そこから都市を、そして世界のフードシステムを変えられると思っている。

もしかしたら、ベテランの農民のみなさんは言うかもしれない。現実は厳しいのだ、理想論はいいけれどまだはやい、と。だから若者は近寄らない。大人が待ったなしの地球環境問題から逃走し、関係貧困に陥った若者の自殺の問題から目を背けているかぎり、若者はあなたに「助けて」といえない。「助けて」から逃げてはならない。世界的難問に立ち向かう主役は、自然と人間を往還する農業や漁業や林業だ。若者が使命感を抱いても当然だろう。日本政府はそのような若者たちの姿をきちんと評価し、グローバル・フードシステムを崩す世界貢献産業としての農業を価値づけていくべきだろう。

日本の農協もやるべきことも多い。農協がやることは、原料が他国の肥料を買うことではない。原料が化石燃料の肥料を買うことでもない。石油由来の肥料を買っても、石油産出量は限りなくゼロに近い日本を富ますことはできない。そうではなく、国内産の自然肥料、地域で流通する種子の交換を普及することである。農家のふところに日本銀行券を増やすばかりではなく、関係資本を増やすことである。地域通貨、人間関係、農業をする尊厳、それらに労力を費やすべきだろう。

不耕起農法の関心も若者は高い。研究機関もまた、世界で広まりつつある不耕起農法の実験を支えなければならない。生産量をほどほどに保ちつつ、休耕地を利用して、環境負荷のかからない農業を目指していくために。世界の農業先進国と比べて比較的小さな圃場の日本こそ、その実験にふさわしい。

農協がやるべきこと

農協がやるべきことは、世界中の貧困者の生命であがなわれた、グローバル・フードシステムを支えることではない。それを分解し、自然の力に根ざした小さなフードコミュニティを作ることだ。だって、協同組合ではないですか。資本主義の横暴を批判して生まれた協同組合が、資本主義的思考になってどうするのですか。

農協が雇うべき人材は、事務方だけであってはならない。高卒と大卒の若手実験農民を大量に雇って、農協直営の有機農場で働いてもらい、きちんと給与を支払い、収穫物は地元の給食調理場に購入してもらって、日本の有機農法・自然農法の割合、そして若手の生産者の割合を農協の力で上げるくらいの改革を構想できないだろうか。そうしなければ、ここ五年の日本農業崩落の危機には間に合わない。

農業はマルチタスク

アメリカのジャーナリスト、ラジ・パテルは『貧困と飢餓』のなかで、このフードシステムを砂時計にたとえている。膨大な生産者と膨大な消費者をつなぐのは、砂時計のくびれにある、多国籍企業である。くびれには資本と情報と高価な農業技術が集まり、安価な穀物をここから輸出し、膨大な利益を得ることができる。

ブラジルの大豆畑をみれば、「勝てない」と農業経済学者は言う。本当だろうか。どんなルールで勝負しようと思っているのだろうか。それよりも、砂時計に穴を開けねばならない。穴をあければ、直接消費者に届く。くびれを通さないつながりを生み出さねばならない。

経済合理性という狭いところで勝負するなら、負けは確定している。農業には、人間関係を増幅する機能、自然と人間の物質循環力を高める機能、机上教育に厚みを持たせる機能、リタイアした世代の健康を保持する機能（介護施設や病院施設にはもっと農園を導入すべきだ）、コミュニティを醸成する機能、生産者に誇りを持たせる機能（日本には人から誇りを奪う仕事が多すぎる）、地域の景観を保持する機能がある。

農業はマルチタスクだ。日本中にブラジルの大豆畑のような景色が広がるとしたら、それは単純に美しくない。景観とは、刹那的に形成されるものではない。長い時間をかけなければならない。自分の人生の終わりの後を見据えている格好いい人びとの多い農村の景観は美しく、現在の経済性を追求するばかりの都市の景観は単調で、面白くない。価値観が大きく変わりつつある若者は、自分が老人になったあとを見据えた美しい農村に住みたいと今後思うだろう。農業の抜本的な変化を恐れてはならない。